

東南アジア研究センター図書室

東南アジア研究センター資料部 助手 北村 由美

東南アジア研究センターは、鴨川沿いの川端通りに面して位置し、煉瓦造りの図書室を中心にこじんまりした美しいキャンパスを形作っている。当図書室は、昭和40年（1965）に東南アジア研究センターが官制化すると同時に開設され、昭和61年（1986）に現在の建物に移った。建物はもともと明治20年（1887）に設立された京都織物会社に属し、現在は京都大学歴史的建造物に指定されている。アーチ型の渡り廊下がつなぐ2棟の赤レンガ作りの建物で、ちょっとした観光名所になっているのか、いくつかの京都関係のウェブサイトでも紹介されているのを見かける。また、その古風なつくりとアーチ下の大きな2枚扉が他にないためか、何度かビデオドラマ等にも地方刑務所として「出演」しており、その度に図書室の前には、親分を迎える舎弟や、黒塗りのベンツがつめかけるといふ騒ぎも何回か目にした。

このように、非常に特徴のある外観を持つ図書室であるが、その蔵書内容も多彩である。東南アジアに関する資料を言語形態に関わらず収集するという姿勢で収集された蔵書構成であり、現在12万点以上が登録されている。登録されているうち7割が和漢書以外であり、タイ語、インドネシア語を初めとして東南アジア諸国現地語資料も多い。このような外観、蔵書の特徴は、センター所員にとってはもちろん誇りであるが、その特徴ゆえの悩みの種も多い。まず、建物の面では、高い天井が非常に優美であるが、各種工事は大変難しく業者泣かせである。また冬はいつまでたっても部屋が暖まらない。そして、2棟のうちの1棟の書庫内は、迷路のようなつくりと急な階段で利用者と図書室職員を悩ませている。もちろん蔵書スペースの余裕もかなり

厳しく、渡り廊下にまで並べた書架の重みで床が抜けないか心配しているような状態である。そして、蔵書の登録・検索も大きな問題である。東南アジアの各種言語資料は、タイ語、ビルマ語のように文字そのものが現行のNACSIS-CATでは対応されておらず、かといって言語の性質を考えるとローマ字化入力しても、検索が難しい。利用者環境を整える為の創意工夫が求められている。

これらの諸事情に頭を抱えながらも、当センターでは、東南アジア研究の基盤となるべく資料整備に力をいれ、多言語に付随する問題にも前向きな取り組みを行っている。昨年度は、東南アジア諸国語資料の中で当センターがインドネシア語に並んで現地語資料の中で最も多く所蔵するタイ語をタイ文字のまま入力・検索できるタイ語Web OPACを、客員研究員の協力により構築することができた（<http://library.cseas.kyoto-u.ac.jp/cseas/>）。今後はビルマ語やラオ語等、他の言語にも対応できるシステム作りに取り組むべく検討中である。東南アジアに関する情報収集・発信の拠点となること。それが東南アジア研究センターと図書室の未来に向けた大きな目標である。

（きたむら ゆみ）

